

ウルガ

1. 事業実施の目的

博士論文執筆のための調査・研究活動

2. 実施場所

中国内モンゴル自治区バヤンノール市ウラドー中旗海流図鎮

3. 実施期日

令和元年5月9日（木）～令和元年6月22日（土）

4. 成果報告

●事業の概要

報告者は、中国内モンゴル自治区において、国家政策によって都市に移住させられたモンゴル族の牧民たちの都市移住後の生活実態に関わる調査を行った。本調査の目的は、中国内モンゴル自治区バヤンノール市ウラドー中旗海流図鎮に移住させられた、モンゴル族の牧民の家庭生活や都市におけるコミュニティのあり方などに関して調査を行い、牧民たちが日常生活で自分の民族的アイデンティティをどのように認識しているのかを解明するためのデータを収集することである。

① 牧民たちの移住後の生活に関する基礎調査

今回の調査は、主に海流図鎮に移住したモンゴル族の牧民における移住後の生活状況に関して、計12の牧民家庭に対して聞き取り調査を実施した。聞き取り調査の内容について、具体的な調査の項目は、①海流図鎮に移住した時間、原因、都市における家族構成といった基本情報、②移住後の就職活動や職業、③都市における相互扶助やコミュニティの状況、④被調査者自身が感じた移住前後の生活変化、主に以上の4項目であった。今回の調査により、把握した具体的な状況は、以下のようになっている。

1 80%の牧民家庭は、国家の生態保護政策によって都市に移住したものであり、多くの場合は両親、子供二世帯共住である

2 現地政府の就職支援やハローワークなどの欠如によって、牧民たちが都市での就業は困難なことである。また、中国語が話せない、学歴が低い、牧畜業以外の就業経験が不足などの理由によって、牧民は掃除、皿洗い、建築、土石の仕事などの肉体労働や臨時の仕事に従事していることが多い。

3 都市の移住によって、牧民の消費支出が増加することである。しかし、新しい就業先が見つからないため、収入がなく、多くの牧民が移住後の生活が前よりきつくなつたと認識している。

② 都市における牧民同士のコミュニティに関する基礎調査

調査を始めた頃、都市に移住した牧民たちの居住が分散し、集まる特定の場所はほぼなかった。また、モンゴル族は、回族やウイグル族のように、宗教や飲食慣習によって日常的に集まっているわけではない、そのため、移住したモンゴル族のコミュニティを見つけるのはなかなか困難であった。こうした状況下、あるインフォーマントから、「君は牧民に対して調査したいのだったら、多くの牧民が入っている WeChat 群を紹介してあげよう、そこにいろんな情報があるから」といわれ、報告者を三百八十人ぐらいのメンバーがいる「我爱我的家」という WeChat グループに入れてくれた。

「我爱我的家」WeChat グループ（以下、WeChat グループと略称）とは、現地の牧民が、中国で最も人気のある無料インスタントメッセージングアプリを利用して作ったチャット・グループであり、「我爱我的家」という中国語は自分の故郷を愛しているという意味である。

「我爱我的家」WeChat グループは、2018年にセルグレンという牧民が、放牧禁止した牧民世帯に対して国家が配る禁牧補助金を、地方政府から取り立てるために設立したが、今では就職や家畜販売の情報、地元における祝祭などに関する情報もグループの中で交換されている。また、このグループは、牧民たちのオンラインでのコミュニケーションだけではなく、実際に顔を合わせて食事会や政府へのデモ活動も行うようになっている。

③ 現地のオボー祭祀に関する参与観察

オボーとは山頂や草原に立てられた石を堆積した聖所で、モンゴル族の信仰対象となってきたものである。ウラドー地域には数多くのオボーがあったため、今回報告書者はその中のウリヤスタイオボーの祭祀に参加し、その祭祀について参与観察などの調査を実施した。

ウリヤスタイオボーは、ウラドー中旗の政府所在地海流図から約三十キロのオンゴン鎮のアラタンホシューガチャーに位置している。このオボーが、いつ建てられたかについては、人によって若干説明が異なっているが、文化大革命のときには破壊されたということで一致している。今回は祭祀が途絶えてから50年ぶりに、オボーを復活することができた。昔から現地の人たちは、毎年陰暦の5月13日にオボーを祀っており、今年の祭祀もそのとおりにおこなった。

今回のオボー祭祀には老若男女を問わず、約2000人が参加し、モンゴル族だけでなく、漢族の人々もいた。午前5時に、約10人の長老が、一時間山を登って、6時半ぐらいにオボーが位置している山頂に着いた。その後、オボーの前に設置されている供物台にお酒、羊肉、ミルクなどを捧げ、長老がオボーの祝詞を唱え、皆がオボーを時計回りに三周回ってから、山下にある会場に戻ることになった。

興味深いのは、山下の平たい所に設えた会場で、参拝者や観客などのために臨時の「オボー」が建てられていた。それは、朝早めに来られない人や山を登りたくない人たちも参拝できるように設置されたものである。実は、上述の10人の長老以外の参拝者たちのほとんどがこの臨時の「オボー」を祀っていた。

オボー祭祀が終わると、次はオボーン・ナイルという直会が開催される。そこで、競馬、ブフ（モンゴル相撲）、舞踊、民謡などの伝統行事がおこなわれた。人々は午後まで競馬や相撲を鑑賞して、親戚や友人などとの挨拶に周り、三々五々解散した。

●本事業の実施によって得られた成果

今回の調査を実施したことで、まず、牧民たちの都市での生活状況を概観することができた。

また、WeChat グループなどのインターネット・コミュニティは、都市部に分散して居住するようになった牧民同士が集まり、インターネット・コミュニティを媒介として、牧民たちの共同の利益に結びつくことで彼らの牧民としてのアイデンティティを強化していた。

最後に、オボーは昔からモンゴル族の信仰対象として、彼らの記憶が埋め込まれ、社会的ネットワークの結節点となる重要な場所として機能していた。文化大革命期に途切れていたが、2000年代以後に内モンゴル自治区においてはオボーを復活する動きが強まってきた。それは、政府がオボーを観光資源と見て、モンゴル族の伝統文化として復興させようとしていることと絡んでいる。一方、現地のモンゴル族は、政府の「少数民族の伝統文化を復興しよう」というイデオロギーに迎合しながら、彼らのオボー祭祀を行なっている。また、現地のオボー祭祀は「伝統的」な祭祀とは言えないが、オボー祭祀を媒介として、牧民同士の繋がりを強化するという重要な役割を果たしているのである。

今回の調査では、都市に移住した牧民たちの日常生活についてフィールド調査を実施した。都市における牧民同士のコミュニティのあり方やオボー祭祀を巡って、博士論文に不可欠となる情報やデータを収集することができた。

参考文献：

ボルジギン・オルトナスト

2006 「オボー祭祀-ウジムチン地域の祭祀文化に関する文化人類学的研究」(千葉大学社会文化科学研究科学位論文)

河合洋尚

2013 『景観人類学の課題：中国広州における都市環境の表象と再生』、東京：風響社
奈良雅史

2016 『現代中国の「イスラーム運動」：生きにくさを生きる回族の民族誌』、東京：風響社

伊藤守 編

2017 『コミュニティ事典』、横浜：春風社

●本事業について

この度、総合研究大学院大学の海外学生派遣事業の援助を受けてフィールド調査ができ

たことに感謝の意を表す。本事業により、学生が博士課程における研究を進めていくうえで、基礎データの収集や、方法論的示唆を得るための調査を実施する機会を提供する点においてきわめて実りの多いものであると考えている。今後とも、このような事業が継続されることを希望する。